

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

医学図書館 (2012.06) 59巻2号:131～135.

旭川医科大学図書館での学生との協働事例: Eな時代こそその“絆”

谷本 祥子

旭川医科大学図書館での学生との協働事例：Eな時代こそその“絆”

谷本 祥子*

旭川医科大学図書館

I. はじめに

図書館業務のサポートや学生による選書、上級学生による学習支援活動など、図書館運営への学生参加は多くの大学図書館で行われている。

しかし、旭川医科大学（以下、本学）を含め医学部には多忙を極める学生が多いため、医学部ではそれが難しいとの先入観があり、本学図書館（以下、当館）では近年までほとんど運営に学生を巻き込んでこなかった。

ところが、医学部を含めた学生を取り巻く環境や当館の方針などが若干変化したこともあり、3年ほど前より当館でも、学生との選書ツアーを行ったり非常勤職員として学生を雇用するなどようやく学生との協働の機会を持ち始めた。それらはいずれも、利用者である学生の視点を取り入れることを主目的とした当館側からのほたらきかけで実現したものであった。

その後当館では、思いがけず学生側からのアクションで学生と協働する機会を2度も得たので、それら2事例を紹介する。

II. 事例1：図書館学生委員会

1. 発足の経緯

当館では1990年より夜間の無人対応による特別利用を始め、1996年には特別利用を含めた24時間開館が実現した。当初の利用対象者は申請した職員のみであった。学生の特別利用は、1994年に最上級学年のみを対象としてから段階的に拡大され、2000年には全ての学生が24時間利用できるようになった。そのため夜間・休日の特別利用を無人開館と表現を改めた。

無人開館の対象者と利用時間が拡大され利用者が増えるにしたがい、ルール違反行為やマナーの悪化も目立ってきた。例を挙げると、館内での飲食や、閲覧席に荷物を置いたまま長時間離席する“席取り”、無数の付箋紙を貼りつけた閲覧席の私物化など、周囲の迷惑を顧みない

い行為の数々である。

こうした行為に対し、当館では以前より口頭注意や一部の利用制限などを行ってきたがあまり効果はなく、有効な対策を講じる必要を感じながら、その手段を見つけれずにいた。

状況を重くみた当館では2009年秋、「このまま24時間開館を続けていいのか？」と全ての学生へ向けて問題提起し、図書館長と学生との懇談の機会をもうけた。同年12月に行われた懇談会では、白熱した議論の末に、その場で有志の学生13名が「自分たちの手で学生の図書館利用マナーを改善し、24時間開館を存続させるために活動する！」と名乗りをあげた。これが図書館学生委員会（以下、学生委員会）である。

2. 活動内容

このように発足した学生委員会は、組織としては非公式だが一応の任期や役職も定めている。多少の入れ替わりを経て、発足より2年あまりの2012年2月現在のメンバーは18名を数えるが、時期により臨床実習中の学生もいるため実働メンバーは10名に満たないことが多い。具体的な活動には図書館側との連携が必要であるため、彼らの協議・意思決定の場であるミーティングにはほぼ毎回、当館職員も同席し、必要に応じて助言している。

学生委員会の活動目的は自分たちの手で24時間開館を存続させることであり、それを達成するために彼らが立てた計画は、以下のとおりである。

- (1) まずは短期的対策として、すぐにできることを行動に移す。
- (2) (1) を実行しながら、中期的対策として、マナー悪化をペナルティではなく仕組みによって防ぐ方法を考える。
- (3) さらに、問題なく24時間開館を継続していける状態を保つための長期的対策を考えていく。

このように、適正なマナーの定着を段階的に図っていくようにするものであった（図1）。

*Sachiko TANIMOTO : 〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号。 (2012年3月9日 受理)

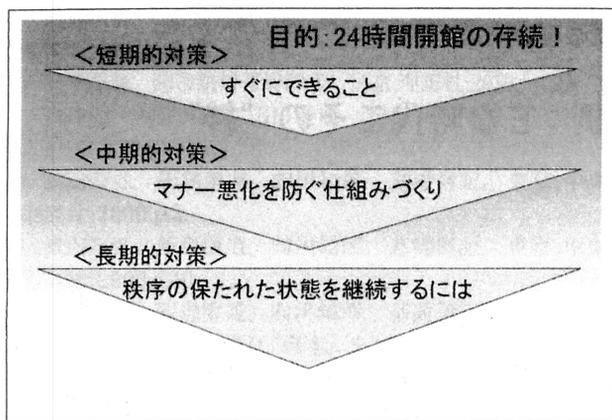


図1. 図書館学生委員会 活動計画

1) 短期的対策

学生委員会ではすぐにできることとして、当館内の現状把握や学生全体への啓蒙活動に取り組んだ。図書館長との懇談会の2日後には、臨床実習中の者を除く学部学生の約7割の署名を集め、「これからも図書館が24時間使えるように」との嘆願書を当館へ届けてきた。また、学部学生全員へ向けて利用状況の改善を訴える啓蒙メールを発信した。さらに翌2010年明けには、進んで当館内を定期的に巡回し、現状把握と状況改善に取り組み始めた。同年4月には、学生全体の決意表明として『旭川医科大学図書館利用者宣言』を採択し、当館内に掲示した。

これらの対策は全て学生委員会のみで行われ、当館職員は小さな相談に乗る程度であった。

2) 中期的対策

短期的対策を実行しながらも、学生委員会は概ね月1回のミーティングを開き、マナー悪化を根本的に防止する仕組みづくりについて協議してきた。原案はすぐに挙がりながらも、それをどう具体的な仕組みにするかを決定するのは簡単ではなかったが、約1年の協議を経て彼らは2つの仕組みを考案した。

①座席利用カードの導入

新たな仕組みの1つ目は、閲覧席の利用中はその利用者の氏名と学生番号を表示させるというものである。この座席利用カード(図2)を2011年4月より希望する学生に発行し始めた。

この仕組みのねらいは匿名意識の払拭にある。学生委員会の意見に、閲覧席をどう使おうとそれが一見誰のものか周囲にわからないため非常識な使い方になっていくのではないかと、利用者の名前を出して匿名性が薄まればある程度乱れの歯止めにならないか、というものがあ

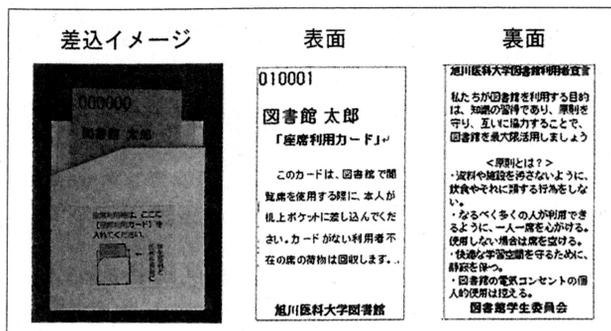


図2. 座席利用カード

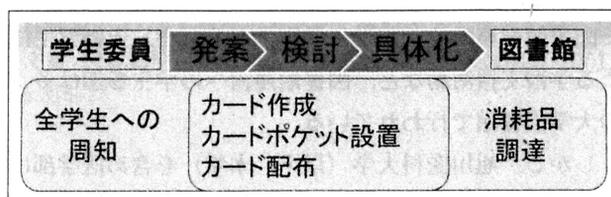


図3. 協力分担

り、そこからこの仕組みの導入に至った。

学生委員会と当館職員との協力分担は、学生の発案を共同で検討し、具体的な制度化を職員側で行う、という流れになった(図3)。

導入までの準備は、実施にかかる消耗品の調達を職員が行い、カードの作成や、個々の閲覧机へのカードポケットの設置、希望学生へのカードの配布は学生委員会と職員が協力して行った。配布にあたっての全学生への周知は学生委員会が担当した。

閲覧席を利用しない学生は座席利用カードの発行を受ける必要はないが、発行から1年近く経った現在、発行率は全学部学生の約9割である。

②24時間開館利用の申請許可制

考案したもう1つの仕組みは、夜間や休日の無人開館利用を申請許可制にすることである。これも座席利用カードと同時期の2011年4月に開始した。それ以前は、全ての学生が入学時に自動的に無人開館利用が可能となっていた。

あえて申請制にしたねらいは、既得権利意識の払拭である。前述したとおり当館の24時間開館は段階的に利用対象が拡大されてきた。初めから無条件に与えられた権利ではなく、先輩たちの努力の積み重ねの上であり、ルールを守るという義務を伴う権利だということを学生に再認識させるのが目的である。無人開館利用を希望する学生がルールを守るとを約束したうえで申請することで、学生の意識が高まることに期待した(図4)。

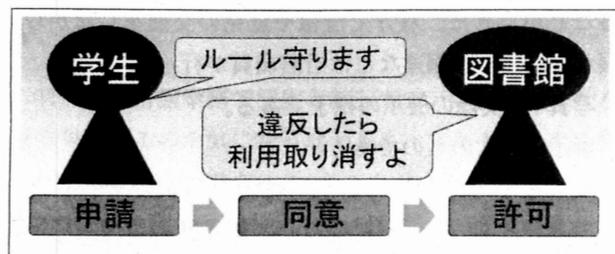


図4. 無人開館利用の許可申請制

この仕組みも学生委員会と当館職員とが協議し、制度化を職員が、学生への周知を学生委員会がそれぞれ担当した。

無人開館利用の申請率も、座席利用カードの発行とほぼ同じく全学部学生の約9割となっている。

3) 長期的対策

学生委員会では、短期的・中期的対策のみではマナー悪化防止策も完全ではなく、歯止めには限界があると考えている。24時間開館を問題なく継続していける状態を保つためには、ほかに永続的な対策も打っていかねばならない。それは、現在の危機意識を後輩たちに引き継いでいくことだと考えている。そのため2010年より学部学生の各学年ごとに、計7回の図書館学生委員会ガイダンスを学生委員会のみで実施している。これまでの図書館利用状況や24時間開館の変遷、学生委員会発足の経緯などについて報告して利用マナー順守を訴え、自分たちの活動の趣旨を伝えて同志を募っている。このガイダンスを機に、学生委員会発足当時まだ入学していなかった低学年学生を中心に新メンバーが数名加わった。

3. 活動の成果

学生全体の利用マナーは、新たな対策を講じた甲斐あってか以前よりは改善したように見受けられる。少なくとも常識を逸脱した閲覧席の私物化はほとんど見られなくなった。

また、座席利用カードの導入によって、離席していてもその席の利用者を特定できるので、利用についての個別指導をしやすくなった利点もある。学科・学年ごとの学生の来館・利用傾向も把握しやすくなった。

ただ、新たな問題も見え始めている。利用者氏名を公開して乱れの防止を狙ったつもりで座席利用カードが、一部の学生には、荷物を置いての離席があたかも公然と許可されたような使い方をされている。また、利用後にカードを持ち帰り忘れる学生が多く、カウンターでは常に数十枚の座席利用カードを忘れ物として預かってお

り、カードの目的が十分に活かされていない。カードを紛失して再発行を求める学生も毎日のようにやってくるなど、当館職員の負担が増した部分もある。それらの対策については、今後学生委員会で検討していくことになるかと思う。

24時間開館利用の許可申請制については、無人開館が職員不在の時間帯であるためその効果の検証は難しい。有人開館時の状態からの推測では、無人開館時も荷物による席取りや複数席占有などは行われていると思われ、館内での飲食の形跡が見られることもあり、残念ながらルールやマナー順守の徹底はされていないようである。年2回の試験期間中は学生委員会による巡回がほぼ毎日夜間に行われ、その報告によると、軽微なルール違反は見られるが巡回期間中に徐々に減っていくとのことである。

4. 協働をととして

各対策の実施に至る流れは、学生委員会の発想・発案をもとにして当館側が実現可能な方法を検討・提言し、具体化・制度化するというのが基本パターンとなっている。

この協働活動をととして、学生委員会のメンバーは次のようなことを感じているようである。

まず、やはり自分たち自身が24時間開館を守っているとの手ごたえがあるという学生が多い。ほかに図書館と学生とのパイプ役を担っているという実感や、われわれ図書館職員や他学年学生との関わりに対する充実感を挙げる学生も複数あり、概ね全員が精神的充実感を得ているようである。

反面、周りの学生が温かい目で見てくれるとは限らず苦勞することや、同志がなかなか増えないという悩みも吐露している。

この学生委員会の活動概要やメンバーの感想など生の声は、『学生協働まっぷ』¹⁾に紹介されている。

一方、当館職員は、学生委員会との協働をととして次のような感触を得ている。

学生委員会の発想には、利用者の視点や心理をうまくとらえたものがあり、それを生かした対策は高い効果が期待できる。利用者という立場の彼らからのアプローチは、職員であるわれわれとは異なる意味合いを利用者に与え、職員には担えない役割が果たせるのではとも期待する。注意を促す声かけも、職員からなら小言にしか聞こえないが、同じ目線の学生からなら“協力お願い”として柔らかく響き良心に届きやすいのではないかと。また、自己犠牲を払って活動する学生の姿に敬意を払い、改心してくれる学生が現れないだろうか。そのような効果に

期待する。他にも職員側には、学生委員会をとおして学生全体の動向についての情報が得やすくなったという利点もある。夜間や休日など職員の目の届かない時間帯の様子も報告が得られるようになった。図書館のために活動してくれる学生たちとの出会いは非常に貴重である。

だが、見返りの期待できないボランティア活動は負担が大きいため学生委員会のモチベーションを維持するのは難しく、それをわれわれ職員がどのように支えるかという課題もある。学生委員会発足当初より、彼らの活動がスムーズにできるようなサポートや、こまめに労いや感謝の声かけをすることは心がけてきた。図書館職員としてこれまで以上に、ルール違反の利用者に対し毅然とした対処も実施している。学生委員会活動と相乗効果のある有効な対策を打ち出したバックアップについては、未だ模索しているところである。

Ⅲ. 事例2：大学祭実行委員会

1. 経緯

本学では毎年6月に大学祭が開催されるが、学生たちには数年前から、作家であり現役医師でもある海堂尊氏の講演会を大学祭のイベントとして開催したいという強い希望があったようである。

2011年の本学大学祭でようやく念願が叶って海堂氏の講演会が実現することに決定し、大学祭実行委員会(以下、学祭委員会)の学生より、学祭委員会と当館とでタイアップ企画ができないかと持ちかけられた。その学生は当館の非常勤職員でもあったため双方にかかわる企画を思いついたという。一方当館にとっても、最も著書を借りられている小説作家が海堂氏という現実もあり、非常に嬉しい提案であったので快諾した。

こうして、講演会との同時開催という形で、学祭委員会との協働による海堂氏関連の展示会²⁾を当館内で開催することとなった。

2. 協働内容

学祭委員会は講演会を始めとする大学祭全体の企画・運営に携わっていたためあまり余力がないのが現実であり、この展示会で多くの役割を担当するのは困難であった。展示内容を検討する中で、ベストセラー作家としての海堂氏を取り上げるだけではもったいないという思いから、現役医師としても活躍中のその業績も集めて展示することにし、学祭委員会には関連の文献リスト作成を任せることにした。少人数ではあったが、ここで思いがけず学生に対する学術情報リテラシー教育の機会をつく

ることができた。双方で情報や意見の交換をしながら、展示物の作成や調達などは当館職員が行った。

写真1は実際の展示の様子である。

展示物は次のものである。

- ・医師としての海堂氏の専門領域であるAi(オートプシー・イメージング)関連の広報資料
- ・海堂氏またはAiについての学術論文
- ・海堂氏の著作関連リスト
- ・海堂氏の著書の手作り豆本とその紹介文、著書に登場する人物や小物を模した装飾など、遊び心を加えた演出を配した展示ケース

これらの展示物は、海堂氏の講演中に当館内から講演会場近くに移動させ、その後に開かれた著書販売会とサイン会に参加の方々にも展示をご覧いただいた。

講演に先立って展示をご覧になった海堂氏ご本人にも好評をいただけ安堵した。なお、展示とともに当館を見学された海堂氏のご案内は、学祭委員会の学生と当館職員が合同で行った。



写真1. 海堂尊 特別展

3. 展示会後と成果

海堂氏が当館へ来館された際に、当館所蔵の同氏の著書に多くのサインをいただいたため、それらを翌週にあらためて当館内に展示した。

また翌月には、展示した学術論文を製本して海堂氏へお送りしたところ大変喜んでいただけた。その作業においても、学祭委員会と当館職員とが協力して行った。

一度限りのイベントではあったが、学祭委員会の学生からは協働企画を実施してよかったとの感想が寄せられ、われわれ職員も、学生との一つの縁から次の縁につながったことに大きな意義を感じた。

IV. おわりに

日々の図書館業務で学生と接しつつ、学生が図書館をどうしているのか気になりながらも、なかなかそれを知る機会のないままであった。

2つの学生団体との協働をとおして、一部ではあるが学生たちの思いに触れることができ、それが図書館に好意的あるいは協力的であったのは大きな喜びである。まるで図書館応援団を得たようなパワーをもらった。

図書館のwebサービスが充実するに従い、図書館職員と利用者との直接の接触の機会が減っている部分もあるが、だからこそ学生とのこのような機会は貴重である。利用者としての発想や、その立場を越えて図書館へ協力してくれる彼らの姿にわれわれが助けられる場面も多く、学生こそその役割に今後も期待したいと思う。

図書館を大切に考えてくれる、あるいは図書館のために率先して行動してくれる学生たちを、今後も継続的にバックアップしていかねばとの思いを新たにしている。

本稿は、2011年11月10日に広島大学で開催された第18回医学図書館研究会において発表した内容に加筆修正したものである。

引用・参考文献

- 1) 学生協働まっぶ[internet]. <http://dl.dropbox.com/u/15665405/map/index.html> [accessed 2012-03-05]
- 2) 先行事例として以下のものがある。
辰野直子, 藤村三枝, 森川安江, 川嶋寛, 寺升夕希, 平野雅穂ほか. 図書館を身近に感じてもらうために: 滋賀医科大学学園祭(若鮎祭) 海堂尊講演会とタイアップした学生との協働による企画. 医学図書館. 2009;56(1):39-44.

Collaboration with Students at the Asahikawa Medical University Library

Sachiko TANIMOTO

Asahikawa Medical University Library. 2-1-1-1, Midorigaoka-higashi, Asahikawa, Hokkaido 078-8510, Japan

Abstract: At the Asahikawa Medical University Library (henceforth called the Library), various opportunities to collaborate with student activities have recently occurred. One such opportunity was a collaboration with the Library Student Committee, which is a student volunteer group; this collaboration considered and innovated new rules for continuing 24-hour operations of the Library while maintaining proper user manners. Another opportunity was a collaboration with the executive committee of the campus festival of

Asahikawa Medical University, for which an exhibition was held in the Library for guests invited to the festival. These occasions were valuable opportunities to become better aware of the enthusiasm of students with regard to the Library.

Key words: Collaboration; Student; Volunteer; Self-Rule; Exhibition

(*igaku Toshokan*. 2012;59(2):131-135)